目次

【第１章】秘密の場所
【第２章】「いってらっしゃい」
【第３章】「おかえり」
【第４章】「だって、女の子だもん」
【第５章】あたしの秘密（あおい編）
【第６章】わたしの秘密（もも編）
【第７章】「いたずらしちゃお」
【第８章】「キスの味はいかが？」
【第９章】「甘えていいんだよ？」
【第１０章】本当の居場所

【第１章】秘密の場所

○ささやきの森（オンラインゲームの中）

　木々が風に揺れる音
　鳥のさえずり
　川の音

もも
「んん……すぅ、すぅ（寝息）」

あおい
「すぅ、すぅ（寝息）」

もも
「んん…なーに、こっち見て。もしかして、女の子同士でちゅーしたいの？」

もも
「なーんて、冗談だよ。にしてもあおいちゃん、起きないねぇ。このまま朝まで寝落ちかなぁ」

もも
「ささやきの森は気持ちいいから、寝ちゃうのもわかるけどねぇ。風景も綺麗で、BGM もいいし。癒されるよね〜」

あおい
「んん……あれ……あれっ？」

もも
「あ、起きた。おはよ、あおいちゃん」

あおい
「お、おはよ……え、もしかして」

もも
「うん、寝ちゃってたよ〜」

あおい
「う、うっそ……ごめん二人とも！」

もも
「いいよいいよ〜。今日に始まったことじゃないし」

あおい
「ううっ。い、いつもごめんなさい……」

もも
「あはは、冗談だって。部活忙しいんでしょ？」

あおい
「う、うん……。顧問が変わって、厳しくなってさ。まぁ、だからって一緒に遊んでる途中で寝ていいってわけじゃないけど」

もも
「いいんだよ〜？このゲームは三人の居場所なんだから。許してあげる！」

あおい
「あはっ。ありがと」

もも
「二人分の、期間限定アバター買ってくれたらね！」

あおい
「ええーっ！」

もも
「あはははっ。ウソウソ。冗談だよ〜」

あおい
「もうっ……ももちゃんってば」

もも
「あおいちゃん、からかったら可愛いんだもん。つい、ね。って……あれ、あなた、もしかしてそのアバター」

あおい
「あっ、期間限定アバター！」

もも
「あーん、かわいい〜！あなたの雰囲気にすっごく合ってる！」

あおい
「ちょっとくるくる回ってみて？　あー、いいなぁ！スカート、ふわってなるんだ！」

もも
「動くと、蝶々の特殊エフェクト出るんだよね」

あおい

「うん、すっごくかわいい。君はいつも、本当にきらきらした女の子だよね。もちろん、ももちゃんも」

もも
「なにー、人をついでみたいに！」

あおい
「違うって」

もも
「あははっ。あ、そういえばー」

あおい
「ん？」

もも
「あおいちゃん、おはようのチューは？」

あおい
「ええっ！そ、それ本当にやるの？」

もも
「当たり前だよぉ。イベントでビリだったバツでしょ？」

あおい
「ええーっ、は、恥ずかしい……」

もも
「えー、かわいいあおいちゃん見たいなー」

あおい
「かっ、か、かわいいなんて……そんなこと」

もも
「んー？ね、あなたもかわいいあおいちゃん見たいよねー」

あおい
「……うう〜…わ、わかったよ」

もも
「はーい、ほっぺに、チュ」

あおい
「…ちゅ。おはよう」

もも
「やーん。ほーら、あなたもほっぺ出して」

あおい
「い、いくよ……おはよ。ちゅっ」
（近づきながら）

もも
「やだー、赤くなっちゃって。二人ともかわいい〜」

あおい
「こんなの、リアルだったら絶対できない……」

もも
「そうなのー？」

あおい
「うん。リアルだとあたし、全然キャラ違うから……」

もも
「……ふうん。そうなんだ」

　　遠くで時計台の鐘の音が鳴る

もも
「あーあ、もう 12 時かぁ」

あおい
「お風呂入らなきゃ」

もも
「帰りたくないなぁ」

あおい
「リアルに？」

もも
「うん」

あおい
「あは。リアルが本当に帰る場所のばずじゃん」

もも
「そうなんだけどねぇ」

あおい
「まぁ……わかるよ」

もも
「え？」

あおい
「あたしも、帰りたくない」

もも
「……うん、そうだよね」

あおい
「あたしたちの居場所、ここだもんね」

もも
「……ねーねー、二人はなんでネットゲーム始めたの〜？」

あおい
「あ……うん、ちょっと」

もも
「ちょっと？」

あおい
「リアルが、窮屈になっちゃって」

もも
「……そうなの？　あなたも？　……そうなんだ」

あおい
「本当の自分が出せなくて」

もも
「出そうとも思えないんだよね」

あおい
「うん」

もも
「わたしたちは今までのわたしたちで出来ていて、周りもそれを期待してる。だから、変えたくても変えられないし、それが窮屈で嫌になるよね」

あおい
「ももちゃん、あたしの心読めるの？」

もも
「なわけないでしょ。わたしもそうだから」

あおい
「……そっか。あたしたち三人とも、同じなんだね」

もも
「現実に居場所がないって、つらいよね。時々、やめたくなっちゃうくらい」

あおい
「そうだね」

もも
「……ねえ、居場所、作らない？」

あおい
「え？」

もも
「三人で作ろうよ。現実に、わたしたちの居場所。誰にも邪魔されない、わたしたちの秘密の場所」

【第２章】いってらっしゃい

○シェアハウス・ベッドルーム（朝）

　自然に囲まれたシェアハウス

　朝の鳥のさえずりが聞こえる
　キングサイズのベッドにもも、あおい、主人公が一緒に寝ている
　左右から二人の寝息が聞こえる

もも
「んん……すぅ、すぅ」

あおい
「すぅ、すぅ……んん〜」

　しばらくするとももが起きる

もも
「ん……ん？あ、おはよぉ。早いねぇ。いま、何時？」

もも
「んー、そろそろ起きなきゃだね。あーあ……学校行きたくなーい。こうやって、３人でずーっと一緒に寝ていたーい……」

あおい
「んん〜」
（寝返りをうつ）

もも
「ふふっ。あおいちゃん、全然起きないね〜」

もも
「あおいちゃーん。そろそろ起きなきゃだよ？　あーおーいーちゃーん。ぎゅ〜」
（起こすというより、ふわふわとかわいくふざけた感じ）

あおい
「ん……んう？　ん〜……ふあぁ。あ、ふたりとも、おはよぅ」

もも
「もー、低血圧なんだからぁ。かーわいい」

あおい
「……かわいくない」

もも
「ね、あなたもそう思うよね〜？　ほらぁ」

あおい
「ん……んうぅ」
（恥ずかしさで枕に顔を埋める）

もも
「ん〜？どしたの、枕に顔うずめて。恥ずかしいのかなぁ？」

あおい
「そ、そんなんじゃない……」

もも
「ふふっ。あれ？あなた、二度寝しそうになってなーい？」

あおい
「ははっ。本当だ」

もも
「こーら、寝たらイタズラしちゃうよ？」
（耳元で）

もも
「ほらぁ、あおいちゃんも起こして？」

あおい
「い、いいよ、あたしは……」

もも
「だーめ。ほらぁ。3…2…」

あおい
「はわわっ」

もも
「1…」

あおい
「寝ちゃ、だめ……」
（耳元で）

もも
「ね？起きて？」
（耳元で）

もも
「ぷっ……きゃははっ！あー、たーのし」

あおい
「もう……からかうなよ」

もも
「ごめん、ごめん。二人のかわいいとこ、見たくって」

あおい
「むぅ……」

もも
「友達といてこんなに楽しいの、初めて。しらゆり荘でシェアハウスしてよかったでしょ？」

あおい
「うん。最初ももちゃんが言い出したときはびっくりしたけど、あたしたち、似た者同士だからね。居心地がよくないわけない。もう、最初から当たり前みたいな感覚だった」

もも
「でしょでしょ？　まー、あなたが男の子見た目だったのは最初慣れなかったけどぉ」

あおい
「そうそう！知っていたとは言え、やっぱりびっくりした」

もも
「でも、話してみたらちゃんと同じだった」

あおい
「うん。毎日画面越しで笑いあってた、あの子なんだってすぐにわかった」

もも
「あとは……見た目もゲームと同じにしたら完璧かなぁ？」

あおい
「ふふ、後々試してみますか」

もも
「なーに、えーって顔して。本当は期待してるんじゃないの？」

あおい
「え？そうなの？」

もも
「そんな顔してるよぉ？」

あおい
「それは今後が楽しみだ」

もも

「えー、あおいちゃんもだよぉ？」

あおい
「え？」

もも
「ゲームの中と同じように、ふわふわなお洋服いつかは着るんだよね？」

あおい
「えっ！あ、あたしは、そんなつもりは……」

もも
「じゃあわたしが勝手にお人形さんにしてあげる」

あおい
「に、似合わないから……」

もも
「そんなことないよぉ。とーってもかわいいと思うよ？」

あおい
「そ、そう……かなぁ……」

もも
「まーた赤くなっちゃって」

あおい
「うぅ……さ、ご飯食べよ、ご飯！」

○シェアハウス・キッチン

　まな板で食べ物を切る音
　お鍋で何かを煮込んでいる音

あおい
「そっち、できた？」

もも
「もうすぐ完成だよ〜。ほら！見て見て」

あおい
「わぁ、かわいい。女の子のお弁当ってかんじ」

もも

「女の子ですから」

あおい
「あはっ、そうだね。明日は、あたしがやってみてもいい？」

もも
「もちろん。じゃあ、その次の日はあなたね」

あおい
「が、頑張ろうね。一緒にかわいいお弁当つくろう」

もも
「期待してまーす」

あおい
「はーい。あはっ」

もも
「ふふっ」

あおい
「あ。君、そろそろ学校いかなきゃいけない時間じゃない？」

もも
「一番ここから遠い学校だもんねぇ。夕飯の仕込みはわたしたちがやっておくから、先に行って」
あおい
「あ、お弁当持った？」

もも
「あ！忘れるとこだった。はい、どうぞ」

あおい
「それじゃ……」

もも・あおい
「いってらっしゃい」

【第３章】「おかえり」

　帰宅の足音
　ドアを開ける音

もも・あおい
「おかえりー！」

もも
「今日もお疲れさま！」

あおい
「もうご飯出来てるよ。今日はハンバーグ！好き？」

もも
「嫌いな人類なんていないに決まってるじゃん」

あおい
「あはは、おいしいよね。なんだかあったかい味がする」

もも
「ん？　君、なんだか今日すごく疲れてるね」

あおい
「そうだね、辛そう。大丈夫？」

もも
「そろそろこの生活にも慣れてきたから、緊張感解けて疲れが一気にきちゃったかなぁ？」

あおい
「……そうだ！耳かきしてあげようか？」

もも
「ふぇ？耳かき？」

あおい
「うん。リラックスできるんじゃないかな？」

もも
「ああー、いいねぇ。でも、綿棒とかあったっけ？」

あおい
「うん。これ」

もも
「おおー、綿棒と梵天……って、何で持ってるの？」

あおい
「こ、細かいことはいいじゃん！」

もも
「……あおいちゃん、いつかやりたいって準備してたんだねぇ……」

あおい
「ち、違ーうっ！！いいから、やる！」

もも
「あはは、わかったってばぁ」

あおい
「コッホン……じゃあ、やるよ。まずは綿棒。いくよー…」

もも
「いっきまーす」

　　耳かきを始める

もも
「あはは、なんか楽しいー」

あおい
「き、気持ちいい？　そっか、よかった」

もも
「奥まではいっちゃったね〜。いーっぱい癒されてね」

　　しばらく綿棒で耳かき

あおい
「じゃあ次は、梵天で、ふわっとするよ」

もも
「はーい。それじゃ、ふわふわ〜っと」

あおい
「くすぐったい？」

もも
「気持ちいいんでしょ？」

あおい
「あは。こしょこしょ〜」

　少しの間、梵天で耳かき

もも
「ん〜。ふ〜」
（耳に息を吹きかける）

あおい
「ももちゃん、まだ早いって」

もも

「えへ。ごめーん」

　梵天で耳かきを続ける

あおい
「じゃあ、最後、ふーってしよう」

もも
「そうだね。ふ〜」

あおい
「ふ〜。はい、終わり。どう？少しは疲れ取れた？」

もも
「だいぶ表情和らいだよ。あおいちゃんのおかげ」

あおい
「あは……実はずっとやりたくて」

もも
「やっぱり！なんでなんで？」

あおい
「なんか、大切な人が弱ってる時に力になれるの、嬉しいかなって」

もも
「ふふ。あおいちゃんってば純情〜」

あおい
「と、ともかく。疲れたら、いつでも呼んでよ。あたしたちがこうやって、癒すからさ」

もも
「うん。いつでも頼ってね」

あおい
「無理しちゃだめだから。この家では、外のこと全部忘れてリラックスしよう。帰ってくるって、そういうことでしょ……おかえり」

【第４章】「だって、女の子だもん」

もも
「二人とも、注目ーっ！」

あおい
「ん？」
（何かお菓子食べながら）

もも
「ふふふ……これ、なーんだ？」

あおい
「あーっ！期間限定アバター！」

もも
「正解！　今日ショッピングしてたら、そっくりの服見つけて。つい買ってきちゃった」

あおい
「かわいい……」

もも
「あおいちゃん、着てみたい？」

あおい
「あ、あたしはいいよ。そういうの、本当、似合わないし……」

もも
「え？着ないっていう選択肢、ないよ？」

あおい
「え」

もも
「ほら、色違いあと二つ買ってきたんだもん。みんなで着るんだよぉ？」

あおい
「えーーっ！！無理無理無理、絶対無理っ！！」

もも
「えーいっ！」

あおい
「わあーっ！」

もも
「あおいちゃん、捕まえた〜。はーい、お洋服脱がせますよ〜」

あおい
「まま、待って！」

もも
「待たなーい」

あおい
「ちょっ、わーーっ！？」

もも
「むむっ。あーおーいーちゃーん？」

あおい
「はっ、はい……」

もも
「何ですかぁ？この下着は……女の子である事をもっと楽しみなさーい！」

あおい
「あう、う……だって……」

もも
「しょうがないなぁ。今度一緒に買いに行ってあげる」

あおい
「ええっ、い、いいよぅ……」

もも
「はい、隙あり！」

あおい
「わっ！」

もも
「あーん、あおいちゃんってばすっごく可愛い！黄色が似合うと思ったんだよね〜」

あおい
「に、似合ってないってばぁ……」

もも
「そんなことないよぉ？ほら、鏡見て？」

あおい
「……え……。これが、あたし……？」

もも
「ふふ。そうだよぉ。ちゃんと女の子でしょ？」

あおい
「……うん……うん」

もも
「ふふ。さーて、今度はあなたの番だよぉ？」

あおい
「あっ、そうだよ！水色、絶対似合う！」

もも
「でしょでしょー？　って、あ！逃げちゃダメ！あおいちゃんっ！」

あおい
「任せて！」

（あおいが主人公を確保する）

あおい
「バスケ部部長に敵うと思うなよーっ」

もも
「さっすが、あおいちゃん。じゃあ……お洋服脱がすよぉ？」

あおい
「わっ……」

もも
「あおいちゃんってば、目逸らしちゃて。かーわいい」

あおい
「だ、だってさ……」

もも
「大丈夫だよぉ。だって、みーんな女の子なんだもんね？　ボタン、一個外して、二個外して……これで最後。外しちゃうからねぇ」

（ももが主人公の服を脱がす）

もも
「そして……これ着ようねぇ」

（主人公が少し抵抗する）

もも
「抵抗してもダメだよぉ？今からあなたは女の子になるの。ふわふわできらきらなお洋服、嬉しいよね？　ほら、ここをこうして……完了！」

あおい
「わーっ！かわいい！君、かわいいよ！」

もも
「下がスースーしちゃうねぇ。スカートだもん、しょうがないよねぇ」

あおい
「わあっ、女の子だ。すごい。やっぱり服ってすごい」

もも
「これでシャイなあおいちゃんも緊張しないで大丈夫だね」

あおい
「うん、あたし、君がこの格好なら全然女友達に思える！」

もも
「君は気づいてなかったかもしれないけど、あおいちゃん、結構あなたと話すとき緊張してたんだよぉ。男の子とどうやって話せばいいかわからないって」

あおい
「でも、この服があればもう大丈夫だ。ねえ、お願い……しらゆり荘にいるとき、ずっとこの服でいてくれない？」

もも
「きゃはは、そうしようー！　なあに、その顔。あおいちゃんのためなんだもん。できるよねぇ？」

あおい
「ねえ、お願い……」

もも
「はい、決定。君は今日から女の子の服しか着ちゃダメだよぉ。パジャマから普段着まで、ぜーんぶだよ。むしろ、嬉しいよね？」

あおい
「ねえ、あたしはすごく嬉しいよ。あはっ、これからよろしくね！」

【第５章】あたしの秘密（あおい編）

あおい
「やっほ。　今日はももちゃん、帰り遅くなるって」

あおい
「そういえば……二人きりって、初めてだね。ももちゃん、たくさんしゃべるから、こう二人きりだと、なんか……いつもと違う感じだね」

あおい
「ご、ごめん。君といて気まずいとか、そういうんじゃないんだ。ただ、どうすればいいのかちょっとよくわからなくて」

あおい
「そ、そうだ。耳かきしてあげるよ。新しい道具買ったんだ。今回は竹の耳かき。綿棒より繊細な音が出るらしいよ」

あおい
「じゃあ、はい。横になって」

あおい
「え？膝枕？ ……い、いいよ。あんまり気持ちよくないかもしれないけど」

あおい
「ふあぁっ！か、髪の毛がくすぐったい。しかも、以外と顔近いんだな……」

あおい
「そ、それじゃ、始めるよ」

（しばらく耳かきする）

あおい
「ねえ。君もさ、ももちゃんがかわいいなって思う？　あたし、羨ましいんだ。ももちゃんのこと。桜の花みたいな笑顔で、みんなを幸せにできる。ふわふわした雰囲気で、みんなが羨む理想の女の子って感じ」
（耳かきしながら）

あおい
「敵わないよ。ああいう子は、生まれ持ってああやって生まれてきたんだから。あたしなんて、男女で、男子なんて寄り付かなくて、なんか女子からのほうがモテて……」

あおい
「みんな、あたしがももちゃんみたいな性格になって、ももちゃんみたいな服を着たら、どう思うのかな。女子は絶対、「わたしたちのあおい様が！」なんて言うんだろうな。え？あおい様って、あたしのあだ名ね。うち女子校で、みんなあたしを王子様扱いするんだ」

あおい
「あはっ、君からしたら信じられないよね。しらゆり荘でのあたしとは全然違うんだ。あっちのあたしは男勝りで、クールで、おしゃれも恋愛も全然興味ない女の子。ううん、もはや男の子。みんなが期待しているとおりの人間」

あおい
「みんな、話題がほしいんだなって。本当のあたしなんて誰もいらない。話題通りの、かっこよくてクールな王子としてのあおい様がほしいんだ。きっと幻滅するよ、本当のあたしを知ったら。あたしがかわいい洋服を着て、ショートケーキなんて食べてたりしたら」

あおい
「あ……ごめん、喋りすぎた」

あおい
「えっと、反対やろうか。逆向いてくれる？」

（主人公が逆を向く）

あおい

「じゃあ、いくよ」

（耳かき＆長い沈黙）

あおい
「……はい、今日の耳かき終わり。変な話しちゃってごめんね。忘れてくれて良いから。あ、次も耳かきしてほしかったら言って。次はもっとリラックスしてもらえるように頑張るからさ」

【第６章】わたしの秘密（もも編）

もも
「やっほー。あおいちゃん、今日部活で遅くなるって。大会前って大変なんだね〜」

もも
「ん？わたしは部活入ってないよ〜。あ、まあ用事はよくできるから、いつも帰ってくるのは夜だけど」

もも
「……ねえ、あおいちゃんと二人きりで耳かきしてもらったんだって？　あははっ、なーにその反応。君も大概わかりやすいよねぇ。どう？気持ちよかった？」

もも
「むー、二人だけ抜け駆けなんてずるいんだから。わたしだけ仲間外れとか、ダメだよぉ。そーだ、今日はわたしが耳かきしてあげよっか。ちょうど新しいの買ったんだよね〜」

もも
「うん、これこれ。じゃあ、ここに横になって？ん？膝枕くらいで照れちゃってるの？かわいい。ふふ、ほら、きなよ」

もも
「はーい、じゃあ、まずはこっちのお耳から初めていくねぇ」

（しばらく耳かき）

もも
「君は、かわいいお耳の形してるよねぇ。ん？どんなって、そうだなぁ。思わずいじめちゃいたくなるような。そうっと優しく刺激を与えて、こうやって、上下にゆっくり動かして」

もも
「気持ちいいね？お耳いじめられて。もっといじってあげるからね」

（しばらく耳かき）

もも
「ふー」
（耳に息を吹きかける）

もも
「ふふ。びっくりした？それじゃ、反対するよ。こっち向いて」

もも
「こっちのお耳も、たーっぷり堪能させてあげる」

（しばらく耳かき）

もも
「……あおいちゃんって、本当純粋だよねぇ。少しのことで恥ずかしがっちゃうし、やましいことなんて何も考えてませーんって感じだし。あんな純粋な子、この世の中になかなかいないよね。うんうん、君もわかってくれててよかった」

もも
「……他の人はほとんど汚れちゃってるもの」

もも
「ごめんね、びっくりさせること言って。でも、わたしが出会った人で、あおいちゃんみたいな子て一人もいなかったの。みんなわたしを所有物のように見てくる。わたしでなくて、わたしの背後にある何かを見てる。たぶん、肩書きとかそんなの。所詮みんな、クラスのマドンナと友達の自分がほしいだけ。官僚の娘であるわたしのお気に入りになりたいだけ。そんなのばっかり」

もも
「わたしが本当に心を開けるできる人なんて、世界のどこにもいなかったの」

もも
「ごめんね、喋りすぎた」
もも
「ふー」
（息を吹きかける）

もも
「ふふ。不意打ち。今日の耳かきはこれでおーしまい！気持ちよかった？　ふふっ。これからも、お耳いじめてほしいときはいつでも呼んでね」

【第７章】「いたずらしちゃお」

もも
「ふぅむ」

もも
「君さ、毛、剃ってみない？」

もも
「あはは、何その反応。おもしろーい！　アメコミみたーい。え？うん、さっきの、本心だよぉ。だってさ、シェアハウスの中でこのドレス着てるんだったら、足丸見えだよぉ？」

もも
「わたしの美的センスからすると、かわいいドレスの下に毛が生えてるのはありえないんだよね」

もも
「中身が女の子なら、外見も女の子でなきゃもったいないよ！ね？だから、毛、剃ってあげる。こっちきて？」
（主人公を無理やり風呂場へ連行しようとする）

もも
「だーめ！抵抗しなーいの！これは君がもっとかわいくなるための通過儀礼なのー！」

あおい
「ただいまー……何やってんの？」

もも
「あおいちゃん、ちょうどいいところに！手伝って、この子わがまま言って聞かないのー！」

あおい
「むむっ。それはよくないね。加勢するよ！」

もも
「ありがとう！じゃあ、この子お風呂場まで連行するの手伝ってくれる？」

あおい
「え？　な、何するの？」

もも
「この子の毛、全身剃り上げるの！」

あおい
「なぁーーーーっ！？」

もも
「お、あおいちゃんもいい反応するね」

あおい
「まままっ、まっ、まって？　な、なんで？」

もも
「だって、この子、女の子なんだよ？かわいいドレス着てるのに、もったいないじゃない」

あおい
「ふーむ…な、なるほど……で、でも、ももちゃんが剃るの？」

もも
「当たり前じゃない」

あおい
「じ、自分で剃ってもらうのは…?」

もも
「この子がすると思う？　こんなに抵抗してるんだよ？」

あおい
「ないだろうな……。わ、わかった。確かにわたしももったいないと思う。　うっ……そんな潤んだ目で見つめないでくれ……」

あおい

「これはね、一人前の女の子になるための試練なんだよ。観念して？　じゃああおいちゃん、そっち持ってー」

あおい
「うん、おっけー。はい、じゃあ、いっせーの！」

○バスルーム

もも
「ふう。ありがとー、あおいちゃん」

あおい
「どういたしまして」

もも
「さーて、じゃあお洋服脱ぎましょうねぇー」

あおい
「あ、あたし制服着替えてくるからっ」

もも
「あら。あおいちゃんってば、恥ずかしいのかな？　それじゃ君も、はーいばんざーい」

もも
「そしたら、まずは肌へのダメージを和らげるために泡いっぱい立てようねー」
（主人公の身体を洗う）

もも
「ふん、ふん、ふふーん♪」
（何かの歌を歌う）

もも
「んー？気持ちよさそうだねぇ。人に身体洗ってもらうの、気持ちいいよねぇ。ほーら、泡がこーんなにふわふわだよぉ」

もも
「そしたら、ついに剃っちゃおうねー。まずはどこから行こうかなぁ〜」

もも
「あれぇ？なんか顔赤いよぉ？ふふ、シャワーなんて浴びてないはずなのに、のぼせちゃったのかなぁ？　それとも、こんなことされるの恥ずかしいのかなぁ？」

もも
「大丈夫だよー、すぐに終わるからね。じゃあ、まずはー……足からいこっか」

（シェービングする音）

もも
「ふふ、見てみて。しっかりつるつるだよぉ。んー、いい触り心地。やっぱり女の子はこうでなきゃねぇ」

あおい
「あ、あのー……部活終わりだからシャワー浴びたいんだけど、まだ終わらなそう？」

もも
「あー、もうちょいかかるかなぁ。入って来ちゃえば？」

あおい
「えええっ！！そ、そんなことできないよ！」

もも
「なんでー？女の子同士だよぉ？」

あおい
「うっ……そ、それでも！」

もも
「ふふ、あおいちゃんってば純情。かーわい。それじゃ、早めに終わらせるからちょっとそこで待ってて」

あおい
「う、うん。ありがと」

もも
「じゃあ、次は腕ね。はい、ちゃんと伸ばして？　そのまま脇と、お腹いくからねぇ」

（長めのシェービングの音）

もも
「ふう。だいぶ剃ったかなぁ。じゃ、最後は……はい。足開いて？」

あおい
「！！！！！」

もも
「なに恥ずかしがってるの〜？　早く開いて？　あおいちゃん待ってるじゃない」

あおい
「あ、あの、もも、ちゃん……」

もも
「ん？」

あおい
「そこはさすがに、自分で剃ってもらうのは、どうでしょう……」

もも
「シャイなこの子がそんなことするわけないじゃなーい。わたしがちゃちゃっと剃っちゃった方が早いよ」

あおい
「さ、さようでございますか……」

もも
「だから、ほら、早く開いてー？　んん、小さく開きすぎ！もーっ、ちょっと失礼！」

ドタバタと物音が聞こえる

あおい
「っ、だ、大丈夫！？」

あおいがお風呂場の扉を開ける

あおい
「って、わ、わぁーーーー！？　も、ももちゃんが襲って……」

もも
「襲うなんて人聞きの悪い！　この子全然足開かないから、わたしが開いてあげたの」

あおい
「それを襲うっていうんじゃ……」

あおい
「ていうか、は、裸ーーーっ！」

あおいが逃げていく

もも
「毛剃るんだから、裸に決まってるじゃない。もぉ、あおいちゃん天然さんかな？」

もも
「ふう。一悶着あったけど、やっとここも剃れるね。ちょーっとくすぐったいかもだけど、我慢してねぇ？」

（シェービングの音がする）

もも
「ふふっ。やだぁ、なに、その表情。すっごくかわいい。かわいいよぉ、君。あは、もっと恥ずかしがっていいんだよぉ？　ねえ、顔、もっとわたしに見せて？」

（シェービングを終える）

もも
「あー、楽しかった！すごくすっきりしたねぇ。つるっつるだよぉ。これでもーっとかわいい女の子に近づいたよ。よかったねぇ。また生えてきたら、自分で剃ってよね？　あ、別に、わたしに剃ってほしいんなら、それでもいいけど？」

もも
「あはっ、すごい勢いで首振っちゃって。残念ー。でもま、今日楽しめたからいっかな。はい、じゃあシャワー浴びてきて。出てきたら、このかわいいお洋服また着せてあげるから……ね？」

【第８章】「キスのお味はいかが？」

あおい
「ねえ、二人はさ、キスってしたことある？」

もも
「えーっ、なーに急にそんなこと聞いて。かわいいーっ」

あおい
「うっ。い、いや、質問に答えてほしいな……」

もも
「んー？　もちろんあるよぉ」

あおい
「もちろん……！！　そ、そうだよね……」

もも
「ふふ、興味あるの？」

あおい
「……う、うん」

もも
「へーぇ。それじゃあ、わたしで試してみる？」

あおい
「ええっ！」

もも
「初めてのキスって、すっごく大事なんだよ。それでキスが好きになるかが決まるんだから。どこの馬の骨とも知らない男じゃなくて、女の子同士のほうが絶対いいよぉ」

あおい
「で、でも……」

もも
「あなたは？　わたしで試してみる？」

あおい
「え、もしかして君も、したことないの？　そ、そっか。そうなんだぁ。なんか安心した。ももちゃん、よくわかったね」

もも
「女の子の勘よ」

あおい
「あはは……でも、言っといてなんだけど、やっぱり恥ずかしいな、キス。ね？君もそうだよね？」

もも
「そんなんじゃいつまで経っても経験できないよぉ？」

あおい
「う……それもそうか」

もも
「しかも男の子とだなんて、絶対二人とも無理でしょ」

あおい
「む、無理です……」

もも
「はい、じゃあ決まりね」

あおい
「くう……」

もも
「それじゃ、二人ともリラックスして、深呼吸」

あおい
「すぅー…はぁー…すぅー…はぁー…」

もも
「そうそう。その調子。いい子だね」

ももが二人に近づく

もも
「それじゃ、まず君からね」

ももが主人公にフレンチキスをする

もも
「ん……どう？わたしの唇、柔らかいでしょ？　もう一回」

ももが主人公にフレンチキスする

もも
「じゃあ、次はあおいちゃんね」

あおい
「う、うん……んっ」

ももがあおいにフレンチキスする

もも
「どう？」

あおい
「な、なんか、優しくて、身体中包まれてる感じ……」

もも
「ふふっ。かわいい感想ありがと。じゃあ、次はもうちょっと本気出しちゃおうかなぁ？」

あおい
「え？　んんっ」

もも
「ん……」

ももがあおいにディープキスをする

あおい
「あ、ももちゃ、だめ……んんっ」

もも
「だめじゃないでしょ？ちゃんと素直になって？」
（キスしながら）

あおい

「んう……はぁっ、はぁっ」

もも
「あおいちゃん、息止めちゃだーめ」

あおい
「む、難しいね、これ……」

もも
「くすっ。最初はね。いっぱいキスして、どんどん慣れてこ？」

あおい
「う、うん」

もも
「羨ましそうに見てるね。大丈夫だよ。今度は君の番だからね」

もも
「ん……」

あおい
「わぁっ……」

ももが主人公にディープキスをする

もも
「どう？気持ちいいよね？こうやって、お互いの舌をいやらしく絡めて、求めあうんだよ」

ももが主人公にディープキスをする

もも
「んー……ごちそうさま。すっごくかわいいキスだったよぉ」

あおい
「どうしたら、ももちゃんみたいに気持ちいいキスできるかな？」

もも
「んー、そうだなぁ。まずは、舌を慣れさせることかなぁ。何かを舐めるって、案外難しかったりするよね。あ、そうだ！この子で練習してみるのはどう？」

あおい
「も、もちろんすごく大好きだし、男子よりは全然ハードル低いんだけど、いきなり口にするのは恥ずかしいなぁ……」

もも
「じゃあ、口じゃなくて耳にしてみよっか」

あおい
「耳？」

もも
「うん。耳なら、耳かきの延長線っぽいでしょ？」

あおい
「確かに！よし、じゃあ耳にするっ」

もも
「うん、そうしよ。それじゃ、特別にわたしも一緒にやってあげる」

あおい
「うん！やろう、やろう！」

もも
「楽しそうだもんねぇ。それじゃ、堪能させてあげる」

あおい
「ちゃんと気持ち良くなってね？」

　ももとあおいが耳にキスし続ける

もも
「ねえ、今どんな気持ち？」
（耳元ささやき）

あおい
「気持ちいい？」
（耳元ささやき）

もも
「二人の女の子にキスされて、気持ちいいよね？」
（耳元ささやき）

もも
「それじゃ今度は、舐めてみよっか」

あおい
「う、うん……はむ」
（耳を咥える）

もも
「もう、あおいちゃん。食べちゃるんじゃなくて、舐めるの」

あおい
「ん……こう、かな？」
（耳を舐める）

もも
「そうそう。それじゃ、わたしも」
（耳舐め）

もも
「君のお耳、柔らかいねぇ」

　しばらく耳舐め

あおい
「はぁ….ん……」

もも
「ふふ、あおいちゃん、疲れてる？」

あおい
「慣れてないのと、緊張で、死にそう……」

もも
「もー、かわいいんだから。それじゃ、今日はこのくらいにしとこっか」

あおい
「うん。ありがとう、練習付き合ってくれて」

もも
「女の子同士だとやりやすいでしょ？」

あおい
「うんっ」

もも
「他にも試したいことあったら、いつでも言ってね」

あおい
「あ……試したいこと……」

もも

「なーに？他にあるの？」

あおい
「あ、ううん。なんでもないっ。それじゃ、あたし先にお風呂入ってくるっ」
もも
「あ、うん。いってらしゃーい」

あおいが走り去る

もも
「何がしたいんだろうねぇ、あおいちゃん」

【第９章】「甘えていいんだよ？」

体温計が鳴る音

もも
「わあ、すごい熱」

あおい
「辛そう……大丈夫？」

もも
「こうなる前に、なんでちゃんと言ってくれなかったかなぁ」

あおい
「まあ、分かる気はするけど……わざわざ言えないよ、体調悪いって」

もも
「なんで？言えばいいじゃない。わたしたち、そういう仲でしょ？本当の友達って、そういうものでしょ？」

あおい
「ももちゃん……」

もも
「我慢なんてしなくていいの。少しでも辛い時は吐き出して、甘えたいときは素直に甘えればいいの。秘密はナシ。それがわたしたちのルールでしょ。それが、わたしたちが一緒に暮らしてる意味でしょ？」

あおい
「うん……そうだったね。ももちゃん、優しいね」

もも
「や、優しくなんてないよ。ただ、ちょっと気になっちゃっただけ」

あおい
「あは」

もも
「も、もうっ。なに、二人してニヤニヤして。ほら、ぼうっとしてないで看病だよ、あおいちゃん！」

あおい
「あ、う、うん！氷枕持ってくる！」
（あおいが走っていく）

もも
「なにが原因でこうなっちゃったのかなぁ。ストレス？疲労？もう、なんで気づけなかったかなぁ、わたし」

あおい
「お待たせ！これ、使って」

もも
「ありがとぉ、あおいちゃん。はい、それじゃ頭上げて」

あおい
「あとこれ、おでこに貼って」

もも
「うん。それじゃ、いくよー……ぴとっ。ふふ、冷たい？」

あおい
「あと何か、必要なものあるかな」

もも
「あとはー……看病する側の愛かな」

あおい
「お、おお……」

もも
「なーに、その反応。かわいー」

あおい
「いや、ももちゃんさすがだなぁって……。よし、愛だね！」
（ベッドの反対側に移動する）

もも
「辛いよね。今日は特別に、思いっきり甘えさせてあげる」
（右側から）

あおい
「だから、早く良くなってね」
（左側から）

もも
「いつも無理するから。たまには、ちゃんと休みなさい」

あおい
「頑張る君も好きだけど、やっぱり心配になっちゃうから」

もも
「あなたの居場所はここなんだから。我慢しなくていいの」

あおい
「あたしたちがいつもそばにいるから」

もも
「あ、おかゆそろそろかな。持ってくるね」

あおい
「うん、ありがとう」

あおい
「……ももちゃんって、不思議だよね。いつも少し意地悪なこと言ってくるのに、本当はすごく優しい子なんだってわかる。明るくて、笑顔も可愛くて、本当に魅力的。だから最近、なおさら気になるんだ。なんでしらゆり荘に来たんだろう、って」

もも
「お〜、いい感じ、いい感じ〜」

あおい
「わー、美味しそう！」

もも
「あおいちゃんの分じゃないからねー？」

あおい
「うっ。わ、わかってるよ！」

もも
「ふふっ。はい、それじゃ、ちょっと待ってね。ふー、ふー、ふー……」

もも
「お口、開けて。はい、あーん……どう？美味しい？」

あおい
「あはっ、幸せそうな顔」

もも
「よかった。体調が悪い時こそ、美味しいもの食べて元気出さなきゃ。はい、次はあおいちゃんの番ね」

あおい
「ええっ。わ、わかった。やってみる……ふー、ふー、ふー……」

あおい
「はい、あーん……わ、食べた」

もも
「あおちゃん、硬くなっちゃって。かーわいっ」

あおい
「な、なんかすごく……嬉しい……」

もも
「そう？」

あおい
「うん。何だろう、この気持ち」

もも
「ふふ、楽しそうで何より」

あおい
「小学生の頃、学校で飼ってたウサギにはじめて餌をあげた時の感覚に似てる……」

もも
「あははっ、君、ウサギ扱いされてるよぉ」

あおい
「違う違う、感覚が一緒ってなだけで！」

もも
「ふふ、冗談だよぉ。必死になってるところも可愛いんだから」

あおい
「うう……か、可愛くない」

もも
「それじゃ、あんまり起こしておくのも悪いし、わたしたちはあっちに行ってよっか」

あおい
「あ、うん。無理して起きちゃダメだよ？」

もも
「今日はしっかり休みなさい。いいね？　早く元気になって、またいっぱい話そうね」

【第１０章】本当の居場所

（川の音）
（木々が揺れる音）
（鳥の鳴き声）

あおい
「ここはいつ来ても素敵な場所だね」

もも
「だよねぇ。しらゆり荘の一番の魅力だよね」

（あおい、寝転がる）

あおい
「はぁ〜。寝転がると気持ちいいよ。二人とも、こっちこっち」

もも
「もー、あおいちゃんってば」

（ももが寝転がる）

もも
「あ、ほんとだ」

あおい
「ほら、君も」

もも
「早く、早く」

（主人公が寝転がる）

もも
「……ねえ、なんで三人で住む場所をしらゆり荘にしたか、覚えてる？」

あおい
「もちろん。囁きの森に似てたんだよね。あたしたちが、よくネットで拠り所にしてた」

もも
「うん。川の音、葉と葉が擦れ合う音、小鳥たちの鳴き声……あのまんまなんだよね」

あおい
「唯一違うのは、白い百合の花が咲いてるところかな」

もも
「……もう一緒に住んで１ヶ月になるんだねぇ」

あおい
「ああ、もうそんなか」

もも
「なーんか感慨深いなぁ」

あおい
「あは。二人はさ、この生活どう思ってる？　あたしは楽しいよ。あと、自由っていうか。普段のあたしじゃ話せないことも話せて、自分らしくいれるなって思う」

もも
「わたしもそうかなぁ。今まで世間を気にしてばっかで、自分がやりたいこととか、自分の気持ちとか抑えてたんだと思う。それが一気になくなったかんじ」

あおい
「ももちゃん、ちょっと暴走しすぎだけどね」

もも
「えー、そう？」

あおい
「そう！なんか、その、えっちな暴走する傾向ある！」

もも
「えー、なになにそれ。かわいいー」

あおい
「また、そんな感じで茶化す…」

もも
「ねぇねぇ、あなんたは？」

あおい
「あたしも聞きたい。君はこの生活、どう思ってる？」

あおい
「……そっか、よかった」

もも
「あなたも、女の子になりたくてこの生活を望んだんだものね。どう？これが女の子だよ」

あおい

「おしゃれして、一緒にきゃいきゃいして、ずーっとおしゃべりして……こんな感じなんだね、本当に心を許した女の子同士って」

もも
「そうだね。わたしも、こんな感じだって知らなかった」

あおい
「え、うそ？」

もも
「だって、周りにこんなに気を許せる友達いなかったから」

あおい
「……ももちゃんでもそうなんだ。なんか安心した」

もも
「なにそれ」

あおい
「この子と話てたんだけどね、ももちゃんは完璧な女の子なんだなーって思ってたの」

もも
「わたしが？　あははは！」

あおい
「そんなおかしい？」

もも
「おかしい、おかしい。だって、わたしすごく性格悪いんだよ」

あおい
「そんなことないよ。少なくともあたしとこの子にはそんなふうに見えてない」

もも
「……そっか。たぶん、二人の前だと違うんだ」

あおい
「そうなのかな。ももちゃんも、あたしと同じなのかな」

もも
「そうだと思う。もちろん君も、そうだよね」

あおい
「ふふ。君と一緒に女の子になれて嬉しかったよ、あたし」

もも
「このまま、ずーっと一緒がいいねぇ」

あおい
「そうだね。ネットゲームからこんな出会いが生まれるなんて思わなかったよ」

もも
「わたしも」

あおい
「ずーっとここにいたいなぁ」

もも
「……うん」

あおい
「このまま、いちゃおうか？」

もも
「それもいいんじゃない？」

あおい
「あはっ」

もも
「あはは」

もも
「ずっとひっそりと暮らしていたいよね。このしらゆり荘で。なににも邪魔されず、秘密の場所として、ずーっと」

あおい
「できるよ、あたしたちなら」

もも
「そうかな」

あおい
「そうだよ」

もも
「…そうかもね」

あおい
「じゃあ、約束ね。ずーっと、この生活をしてることは秘密。友達にも、もちろん親にも」

もも
「うん。三人だけの秘密」

あおい
「君も、いいね？」

もも
「誰にも触れられない、わたしたちだけの秘密」

もも
「……ふふ。次はなにして遊ぼっか」

END